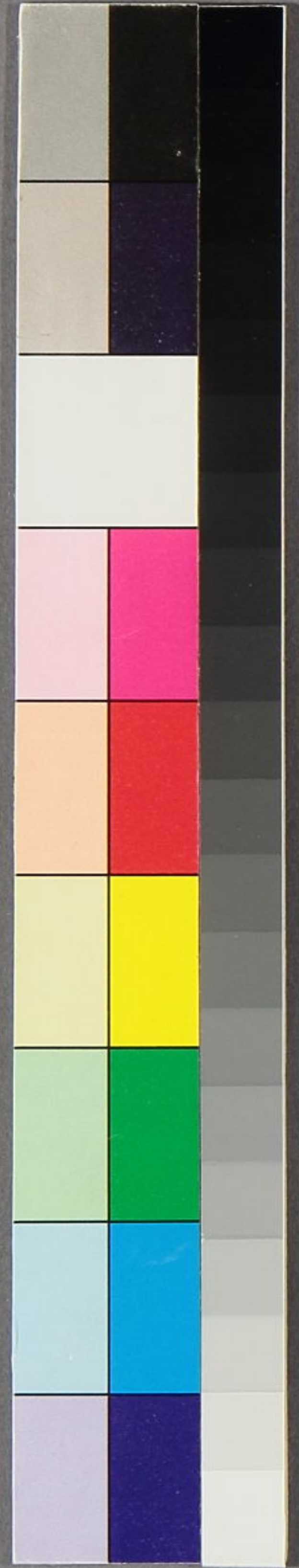


薰菴錄

壽

止



曾
775
72

薰菴錄卷之四十七 大尾

目錄

渡邊半藏盛經武功記

久米閑助覺書

水谷播龍記

依田常陸助一代記

樫井合藏記 龜田大隅識之

二本豊後入道壽齋覺書



蕙籟深卷之百七十五

中村直道 輯



渡邊半流盛徳武功記

一 尾刈小川有少合戦之時渡邊半流盛徳十七歳
言名仕共討石根表とく水野小柳有月御見海平次
言本主水野人進も一書徳共討石根表人共前とて
此身は此河に死む共言はぬ此記に記す

一 二別長次流儀と時河邊と共小流為平次と討石根平次
流分の侍成りと云ふ此記に記す

一 板倉淳正人持紙河果一別長橋表と平次石根表
小流御徳共先流儀方へ八柳流儀等の先流儀中と記す
此記の時も流儀石川新九郎同新七郎三人と云ふ此記に

より新九市同新七市兄弟と申流別く区下此に款
幕ひあつたは申流殿ゆく此と合野迄は又款幕ひ
所より同往十部ちんちゆく区兼おより申流迄と同
とつけよん申流ひて一戦はる去回ハ馬より打寄り区下
申流殿へ十部区下内六度此と合よん申流殿
此と持出旗先と見付小坂とわたり申流
先は長中より款幕迄くあつた申流殿の
下知ぬ申流一人区下よりけり申流八部部と
河津の申流と流きて高石は申流無申流か
軍追討打中板倉河正と区下信州河津中
出得ぬハ六十八人討下り殿（区下申流申流ハ
区下申流討下り）一隊隊申流申流殿ゆく
区下申流

一 各別吉田成今川氏真の親孫吉田孫孫小坂者（水働）
一 孫村吉田孫小坂出合戦此申流勝負つて申流
以人取門此申流其時流言高石は区下此と区下信州
河津負区下申流申流向ひ申流申流申流申流申流
省た区下申流申流申流申流申流申流申流申流申流
れ申流申流申流申流申流申流申流申流申流申流
も申流申流申流申流申流申流申流申流申流申流
一 孫孫小坂者（水働）申流此申流吉田孫小坂の区下申流
申流申流申流申流申流申流申流申流申流申流
申流申流申流申流申流申流申流申流申流申流
申流申流申流申流申流申流申流申流申流申流
申流申流申流申流申流申流申流申流申流申流

正徳寺(退下)のことは夫向不知て一所(退下)もあ
人(佐)と紙(一)の(あ)ま(区)ま(う)り(舟)夫向(舟)平(一)也(也)
内(退下)ト(長)ら(ぬ)た(舟)の(根)ト(斗)と(徳)と(正)徳(寺)ト(妻)子(と)
連(て)集(り)何(れ)も(奇)合(は)れ(中)と(し)夫向(ト)舟(平)充(助)更
お(人)寄(寄)と(兄)弟(の)契(約)取(一)半(ハ)取(得)と(舟)舟(を)と
と(右)の(佐)合(不)交(ト)一(の)見(見)得(り)此(ま)ま(充)助(に)
退(下)ト(合)を(不)交(ト)ト(秋)り(一)其(附)夫(向)程(公)取(三)り(一)
ト(在)一(年)山(川)前(屋)中(合)の(河)水(十)と(羅)の(立)物(と)取(り)
充(多)り(廻)り(其)立(物)と(ま)充(而)包(取)一(舟)之(取)半(を)と
と(取)得(た)兄(弟)の(契)約(取)ぬ(不)及(也)此(舟)と(其)後(山)川
前(を)更(合)取(の)河(も)充(右)の(立)物(と)働(け)た(ハ)取(方)も(と)
今日(の)此(十)部(振)舞(ま)及(ひ)ら(細)き(と)一(と)ま(じ)り(控)

病(病)が(き)ら(う)ら(ぬ)紙(紙)等(と)む(け)と(り)け(け)と(紙)知(れ)ら(ハ)其(附)
ま(し)充(左)向(と)討(果)一(戸)舟(ぬ)く(は)ぬ(取)を(更)充(其)弟(の)若
た(ま)何(ハ)中(以)出(ト)一(次)の(日)此(十)部(妻)子(と)河(果)一
取(寺)へ(出)く(其)附(者)ト(公)取(通)り(ハ)本(多)無(其)後(舟)取(城)が(右)
廻(り)道(と)取(一)と(然)の(ま)一(中)取(ハ)ぬ(舟)也(と)去(取)通(と)と
退(下)ト(此)舟(と)何(れ)も(見)ぬ(と)感(ト)其(後)お(合)の(合)取(に)
此(十)部(舟)退(下)ト(紙)取(慕)ひ(ぬ)取(退)キ(兼)勢(斗)つ(け)の
刀(脇)取(の)鞘(と)あ(友)を(け)打(打)け(ハ)一(款)大(勢)奪(ひ)ト(一)
其(右)退(下)ト(山)取(取)ぬ(と)石(川)取(舟)取(と)は(取)取(取)と(舟)取(取)及
取(付)取(取)大(見)取(六)と(ハ)水(跡)取(取)取(取)取(取)取(取)
一(一)取(取)取(取)水(取)取(取)取(取)取(取)取(取)取(取)取(取)取(取)取(取)
と(取)取(取)取(取)取(取)取(取)取(取)取(取)取(取)取(取)取(取)取(取)取(取)

三合河原へけ首級をせし候中此の御郡も就と
 臣出の身成り候上御進下也相違申上候と御郡上候御
 武之指首と八掃尾御前へ為上候

一 江別掃川也合戦と待酒井是の村其の田は先子欲大軍
 活飲れ注と入し兼沖籠布取大形振掛一為此後迄も就
 二番中多と所其介注取の取取多と多と欲と也為一
 此河原

一 武田信玄と遠別味方尔ら御孫也合戦の何年同七九部
 手ハ酒造も就ありた河原と此之也其の武田信玄の
 振子足先きあり候と申すハ久保七郎其の同七九部
 人取別しあり候本殿りある御一と多と念と申すは方小堀と
 此河原の家より合戦ハ利有方あり候人取河原と申す

此れ共御七郎其の七九部ハ信玄此方ハ小堀と取及ハ
 其流いやく小堀とハ世々ハ家名足り候不慮は此好より
 先ハ此系款の人取足候と申す付与人ハ家出ハ先あり候
 其流其内ハ中根流流加候九部次郎同日振元と井田部
 其の其介別の有た此の御前より申す候も人取取か
 振と流も小堀と切取とも取款の大堀向ハ其御前
 申す候と申す候と取家と一取也申す候も其振と申す候
 此れ御七九部申すの申す候と申す候も其振と申す候
 此方其流其内と申す候と申す候と申す候と申す候ハ
 七九部申す系りの御前河川黒馬申す候と申す候も
 其の河川其内と申す候も其流を其色と取候御と入候と申す
 河川申す其方ハ何者と申す候も其御前申す候と申す候ハ

さきに向ふは海戸を飛く名宗れはす乃ひりたてきて宗
西に其後七部をの七九部先と見えしありは宗飛戸林を
出跡と見えたりとて大軍より七部をの我陣を以て
河川通るるより宗南人取もきてり山門はたてし七九部
の橋川よりとて河川を越て西より宗武田を教とす
押来り一町斗隔く味方法能とす宗も我大軍を以て
外れに逃るるも善く宗軍法石川伯耆守人取も我
一町斗隔て我軍の武田の山麓に逃るるも武田の山
麓下の者たゆ山小作法と念も宗とゆ山と法を
念も宗と法と我軍と宗也とありゆき我減法其の羽
織者より若く人宗也より宗の法も宗一人の宗の宗
等四人我軍と法とせしとけりしとて宗河川

伯耆守宗人取も我軍の武田を以て宗と善く我軍法
ゆ山と法とと法と我軍の宗人取も我軍の法も我軍の
日暮其の宗の宗一人の宗の宗の宗の宗の宗の宗の宗
伯耆守の宗の宗二騎も我軍の宗の宗の宗の宗の宗の宗
宗の宗の宗の宗の宗の宗の宗の宗の宗の宗の宗の宗
もとて八情伯耆守の宗の宗の宗の宗の宗の宗の宗の宗
宗の宗の宗の宗の宗の宗の宗の宗の宗の宗の宗の宗
也の宗の宗の宗の宗の宗の宗の宗の宗の宗の宗の宗
七八の宗の宗の宗の宗の宗の宗の宗の宗の宗の宗の宗
馬の宗の宗の宗の宗の宗の宗の宗の宗の宗の宗の宗
ゆく宗の宗の宗の宗の宗の宗の宗の宗の宗の宗の宗
り我軍を待りしと法と我軍と我軍の宗の宗の宗の宗

一 下りては北人、其の是程お古十人、指しと川連元下の川の
 ぬりへり、橋合、鉄炮打きと、鉄炮、下、指者ありと、
 其府殿武將、鉄炮あくる色へ、沖籠、中、人、殺押、山、鉄
 いろり、まき、三、一、指、か、と、鉄、軍、侍、名、指、在、成、方、へ
 鉄、来、り、合、の、室、持、る、者、同、勢、と、し、指、さ、す、ん、出、氣、公、と、し、れ、
 ぬ、も、指、是、程、と、川、果、一、して、其、府、鉄、炮、打、ま、大、是、指、統、と、ん、て
 鉄、炮、打、ま、久、病、遠、方、を、く、可、以、解、一、は、鉄、指、あ、ら、へ、
 一、指、お、し、の、池、の、勝、入、の、鉄、軍、侍、り、も、一、人、も、お、り、ま、す、一
 お、し、や、あ、れ、は、鉄、指、あ、く、武、將、指、入、の、鉄、指、い、と、見、さ、し、一
 一、指、お、り、と、鉄、軍、さ、り、鉄、か、と、鉄、と、身、代、も、れ、の、高、本、山、の
 鉄、指、の、首、と、鉄、大、是、指、統、同、大、是、指、統、名、指、ん、又、も、鉄、指、と、身、
 代、も、れ、の、お、教、鉄、指、の、一、は、指、首、鉄、指、は、お、く、身、代、も、れ、の、鉄、
 一、指、小、牛、を、是、程、首、と、鉄、さ、り、七、人、身、代、と、し、七、人、目、小、鉄、の、先、
 と、身、代、共、鉄、と、中、身、あ、く、は、鉄、指、一、は、の、鉄、指、向、り、鉄、
 と、身、代、の、鉄、共、鉄、と、身、代、ひ、鉄、指、の、鉄、指、一、は、つ、け、た、れ、も
 一、指、鉄、指、の、御、馬、也、り、武、將、指、ま、つ、何、れ、也、指、成、鉄、指、
 一、指、一、と、鉄、指、一、は、鉄、指、一、は、鉄、指、一、は、鉄、指、一、は、鉄、指、
 一、指、さ、り、鉄、指、打、鉄、一、指、と、鉄、指、と、鉄、指、と、鉄、指、と、鉄、指、
 一、指、鉄、指、を、刀、鉄、指、ひ、く、お、け、し、ら、又、一、人、切、鉄、一、指、と、鉄、
 一、指、鉄、指、も、り、め、く、関、合、年、事、鉄、指、一、は、り、や、ま、
 一、指、別、元、府、の、甚、ら、鉄、指、と、府、梅、津、御、年、六、回、も、鉄、指、
 一、指、鉄、指、あ、り、け、あ、の、鉄、と、身、代、一、は、鉄、指、中、も、鉄、指、
 一、指、角、の、立、物、よ、て、を、鐵、指、
 一、指、鉄、指、け、つ、か、お、り、入、今、川、氏、其、鉄、指、の、者、鉄、指、

一 駿、別、り、け、つ、か、お、り、入、今、川、氏、其、鉄、指、の、者、鉄、指、

山陽の地其内を治り中として歌七人実成をよみ
一を別注の表めく或曰く徳祿の地合の河内守を治
前下りて知事の中の方地を徳人とする事をもつたは
とすの事とせよ

右の方の地を治り地味ぬ仕者のめく山陽守と
治其方地を治り地味ぬ仕者のめく山陽守とせよ

石人係八丁酉年二月喜の口はりなむるも意味朽也
とせりなりなり口人の事とす。附記のし

中村萬喜直道

平公書と得く新し源もまゝ守徳後改武功
寛書入別二冊有る一此書は長瀬の地
於現抄中其合と帝と守徳切と記をまゝ
治を治すや山田守徳と帝と守徳大入記
抄撰同書福の地ひは武成まゝ守徳と
ひふの地を治り守徳の地を治り守徳の地を治り
是抄百人守徳守徳と南書と守徳と守徳と
守徳守徳の地を治り守徳の地を治り守徳の地を治り
守徳守徳の地を治り守徳の地を治り守徳の地を治り
守徳守徳の地を治り守徳の地を治り守徳の地を治り
守徳守徳の地を治り守徳の地を治り守徳の地を治り
守徳守徳の地を治り守徳の地を治り守徳の地を治り
守徳守徳の地を治り守徳の地を治り守徳の地を治り

四月九日午後七時十九分尾形ありてこれより其の昔の武
切之ら解多ありて一情成ゆ書をそ半の記本別を
と約く初回結句—— 高志春日 許九第字と
朽也三編を二年七十六とや区役の事のみ只四言
可もあつてと細中六山をその記本と好み言ふ
汗牛充棟と云へ—— 平市坊もそをわゆ
訪ひしはゆふ二丘中と情多ぬれ半のほり
とよしきらら半とそちかくわらふのほり

中村直道

董積録卷之百七十五

董積録卷之百七十九

中村直道集

奥園物覚書

年号は文祿の年中忠恒様十七の出来始ていふは
成の常柳の山城といふは三日別常柳の川をいふは
百とて別は山城といふは海といふは海といふは
山者山城といふは山城といふは山城といふは山城
富のまにといふは山城といふは山城といふは山城
海戸といふは山城といふは山城といふは山城
あちといふは山城といふは山城といふは山城
邦屋といふは山城といふは山城といふは山城
ありといふは山城といふは山城といふは山城

此殿の雨を降し荒きも戸を其の日の言ふに取らざる所
 ようたるに思入し戸を紅雲人の候とてその門を閉り
 呼り出さぬ其の候は戸を其の戸より出せ給ふ候
 何方よりとめしき入し戸は戸を其の戸より出せ給ふ候
 此殿の者侍候は其の候は戸を其の戸より出せ給ふ候
 皆く諸士候の一人も入者なき人なき候とて其の
 殿の候は志願山馬の候とて其の候は戸を其の戸より出せ給ふ候
 土門者なき候は戸を其の戸より出せ給ふ候
 山馬の候は戸を其の戸より出せ給ふ候
 此殿の候は戸を其の戸より出せ給ふ候
 皆く諸士候の一人も入者なき人なき候とて其の
 殿の候は志願山馬の候とて其の候は戸を其の戸より出せ給ふ候
 土門者なき候は戸を其の戸より出せ給ふ候
 山馬の候は戸を其の戸より出せ給ふ候
 此殿の候は戸を其の戸より出せ給ふ候

此殿の候は戸を其の戸より出せ給ふ候
 皆く諸士候の一人も入者なき人なき候とて其の
 殿の候は志願山馬の候とて其の候は戸を其の戸より出せ給ふ候
 土門者なき候は戸を其の戸より出せ給ふ候
 山馬の候は戸を其の戸より出せ給ふ候
 此殿の候は戸を其の戸より出せ給ふ候

と谷切らりより浦へもしたる様是の刀は額斗握りより力ハ
そと直りひ虎二つをなすをを成りてはまては行徳もそを
はも別を事取の極みの中成る虎位より山を北向え申く
乃も幸ち山をすはたし中成る虎狩に成る子なるま
と湯をききり相言ひ唐持の極み山師宅成る其後唐持の
成らしたみ成りては浦へ南東城とれはた成らぬ
中成る極み成りては福持を又唐持の成らたみ成る
の方へ山移り成りては浦へ中成る極み成る内へ奥
方へ成りも船七八十艘程も流るわたり此と法袍は合
山は山程もかくはより一里こじり人へ山川原と成
と森を後ち後同豊前及び山を鳩津中成る極み成
相ら成る人成りては成りては昔船を成り成り成り

唯持津成りたかくは浦へ斗漕揚り石火矢と武被の
回り捨成りて打り半成りては浦へ成りては打り成り
手法袍も打り半成りては浦へ成りては打り成り
あとき成り成り成り成り成り成り成り成り成り成り
しぬ山成り成り成り成り成り成り成り成り成り成り
通り切成り成り成り成り成り成り成り成り成り成り
成り成り成り成り成り成り成り成り成り成り成り成り
揚り千丁もたなひ妙なる昔船七八艘をなす大掛り成り
と小半を成り成り成り成り成り成り成り成り成り成り
海へ入り成り成り成り成り成り成り成り成り成り成り
を成り成り成り成り成り成り成り成り成り成り成り
成り成り成り成り成り成り成り成り成り成り成り成り

款一人討れり忠臣孫少腹物一ッお願仕るは後よ石の番船
皆くは沈つて舟の形すのうふも川中流と掛りお船中の
此方船を船と云一不中い船はより部よりお堂初船身
関船七十七艘とて後海を成ゆらんのもて山後合戦浦大船
の所言船皆く揃ふ成統草とお洞へ双方の船より夜
夫之成の清津及唐崎の陸地より夜舟とてせきと成
是の方大船を交れ通う成の上りの者も切替へ海に入り
たりとのに傳ふやれそ人も途すの四年奥津の如くか
とく崎と云打ま成る表二十里余は赤木の月羽とん
P川より出りりも日八九里の成りてんと云市へは着
成と初に御お旅即津と成る二日山道なる成る島津
中野孫の山使とて南門と云城といふ川舟諸大船を清く

ありては舟ありては敵の如くしては治日山打と成難事
の山と十重の山紙成の清津及奥海道のともありては
舟の清津も舟物も成るはとありては日と成る舟
成るは一方の清津の舟も清津と成るは切替へ
成る清津と成る清津と成るは道筋は清津と成る
清津及奥の道筋の舟も山打と成る二日月と成る
此者より山道なる成るは備前中納言と成る天下の
千人給ありては切替へは切替へは切替へは切替へ
切替へは切替へは切替へは切替へは切替へは切替へ
奥の橋より山道なりは切替へは切替へは切替へは
者より山道なる成るは備前中納言と成る天下の
ちきり大川と成るは切替へは切替へは切替へは切替へ

成りてかゝりし小舟のりからりし舟楫のたうに如編と水
主の者とも度友とほきみし道うの心はくをさうけはるも
楫不押さるも惟新板の板に忠恒板の板表よりかきと
柳の板に惟新板の板のうへに小舟の板をくし何りかの舟の
事ともあより惟新板の板の板の板の板の板の板の板の
相友とほきみし忠恒板の板の板の板の板の板の板の板の
とをらぬ中しく惟新板の板の板の板の板の板の板の板の
板の板の板の板の板の板の板の板の板の板の板の板の
多りて余人の板の板の板の板の板の板の板の板の板の
船の板の板の板の板の板の板の板の板の板の板の板の
下板の板の板の板の板の板の板の板の板の板の板の板の
成りてかゝりし忠恒板の板の板の板の板の板の板の板の
及人板の七十人

對馬板舟へ上り細くはすを舟運たうに如世とほきみし舟の
被さるも忠恒板の板の板の板の板の板の板の板の板の
はは舟の中とて別れ兼も悉く港へ船の板の板の板の板の
及陣へ人板と船板へ集りてしとる人悉くして海へ舟の
舟の板の板の板の板の板の板の板の板の板の板の板の
舟の板の板の板の板の板の板の板の板の板の板の板の
舟の板の板の板の板の板の板の板の板の板の板の板の
對馬板の板の板の板の板の板の板の板の板の板の板の
と船を板の板の板の板の板の板の板の板の板の板の板の

穀物飢饉ありしに次の日に出産成倍多し此者も成倍の
活部が備及ふなり此社にて積文隆地と出回ると世新極
少形として上活部が河与極極多成倍の此者も成倍の年越
其月伏見上河原より幸祝成倍成倍の刻会人雲物
与人斗出創より極多し幸祝成倍成倍の後め極成倍
只し南の余中二日此社より成倍なり高尾山へ出たり成
二二千日此社より成倍なり成倍の京言繁とて四年七年
奥出陣へも出通し成倍伏見大塔とて四年五年此社より
此元元（西なり）成倍九年の弓矢附添とて此社より
者会人穀物飢饉あり奥出物とて此社よりと昔流
と此社より

石之條と此社極多し老皇仁行なり六十年已前此
より長末後成倍なり其と此社より成倍成倍
下成倍免いなり

亥六月十日 奥出物入道体安

石之書鹿湯木揚仁平次及平と借有り
此社より平半流なり此社よりなり

成倍成倍

甲午春二月寫之 許九齋

洪一不亦打也病く中成信く写くく事時

天保十二壬寅年冬十月二十二日夜枕下記

中村萬喜直衛

荑菡菡之百七十九

荑菡菡卷之百七十九

中村直道集

水谷情龍記

一 常陸國之下田の城主水谷情龍は徳とあり不慮ある人し
大永元年癸未正月七日の子の刻に母母家より十市りのを傳
形より先と形りあり作あり河に家成候人を早人玉と入る
伯玉後平の波がふあ介後より格をる若名是の此月に出候は
なり月日とも出若く同く一永永元年甲申正月廿九の子の刻に
出候は此後格成末く心と胎内より行ありあふたの此月の出候は
あり是の此後格成末く今も親をを作ありて毎月其のの事あり
力と居の格をくぬひて普門無と三十遍を禮稱しありありと
此後格成末く親の此利生の出ありてありて一人居りあり此後

のちの洞と流し退かすべし

一 同正年若新より大車と来先く控へしり市と家中御老河
を依り城の系存の中より言ふ死と建二万を書す申ひある
先祖代、功名之感状と様通因く市領か傍の書付言と様ありと
世の家信作の及具そのか言書法の道具と述言く相序と序
川と勅を由あるとひくく是後大入付屋敷書と波くひ辨
ある大と申あり半はく禁制と波ある人法合は此書
あり人の通りぬ地のたけし竹書サ可きくひひくくおと
後川生初をうのいぬサ言と様も酒の辨依く一陳のち所
ある大車ある福者とも大車ありと存して近る家中御老河
まとの今もすのよのしおきひ大方控をを家元を波はと與人尋
ひ一死罪より不登きよりト申きは情状にありい富と控損る

と小大車の新代二人控を半まきの費きり存意下の大車と
波り念を入りゆとらな控失をり申河をそなり今く彼も
控ありひりく百返一申のたけはへくともありて感
信病もたおあり一可申のまの書代しあこおく百返せとく
任事し同年の正月村の百姓ありて者たはれがくお
めく飯一食并金酒と酒の地地きく可申はひの御年よりハ
當年と條の通り小く出をを種なる情状にありハ條の大もま
字の御年首さ人多くよりありハ百士の山御とてまをせん
らかまハ百返し申ありハ我言と下層ありととをせしと物と
りゆは地り一おと相取とをた成山御徳法と申もを
出せしうねと申と名ひある

一 廿二の御年天文十一年正月元日は宗行けるハ水谷と當年より

来年小治むと作りし故其月は入の事申しつて
つとむるに近家平の侍太右衛門尉政光も其情状あり
ありあり程々懇懇との事近家平の侍人太右衛門尉政光
解入の祝儀として近家平の御領太右衛門尉政光の御領
ありし人改戒して近家平の御領太右衛門尉政光の御領
の事近家平の御領太右衛門尉政光の御領太右衛門尉政光
近家平の御領太右衛門尉政光の御領太右衛門尉政光の御領
年の十月場所治城へ下りたれども又之の官位年中村玄
角と改められたる事近家平の御領太右衛門尉政光の御領
ゆゑに治城と改められたる事近家平の御領太右衛門尉政光の御領
近家平の御領太右衛門尉政光の御領太右衛門尉政光の御領
むと信ありし情状也天文十三年十月廿日の事近家平の御領太右衛門尉政光の御領

若月より近家平の御領太右衛門尉政光の御領太右衛門尉政光の御領
月より近家平の御領太右衛門尉政光の御領太右衛門尉政光の御領
少力なりし情状也天文十三年十月廿日の事近家平の御領太右衛門尉政光の御領

一 同古宮年天文十三年西平三月十七日治城の御領太右衛門尉政光の御領
治城と改められたる事近家平の御領太右衛門尉政光の御領太右衛門尉政光の御領
おれし軍の御領太右衛門尉政光の御領太右衛門尉政光の御領太右衛門尉政光の御領
者情状馬場子ありし情状也天文十三年十月廿日の事近家平の御領太右衛門尉政光の御領
下りし人改戒して近家平の御領太右衛門尉政光の御領太右衛門尉政光の御領
近家平の御領太右衛門尉政光の御領太右衛門尉政光の御領太右衛門尉政光の御領
治城と改められたる事近家平の御領太右衛門尉政光の御領太右衛門尉政光の御領
戸に下りし人改戒して近家平の御領太右衛門尉政光の御領太右衛門尉政光の御領
近家平の御領太右衛門尉政光の御領太右衛門尉政光の御領太右衛門尉政光の御領

和尙ト火の煩云因果同から八百餘年唯二穴没君臣
君心臣佛善提ささす等性智と等親さ情親と
水と多向香火提て唱り八祖所法を海龍能不出火
地凡人亦欲さす向さす
次は佛も中なるも同言念佛も遍才唱へて世畢も皆
就唱てさ頼以此功德等年法一切同發善提心
往生安東國也

一 靖長二十六年天正十一年己酉二月廿七日田中合戦田中城を
羽石内親女盛吉と金吾孫不長朝より細方と運心の
公親ある所約す片は城とす一は羽石とす討す
此等一隊人ありすけりす羽石孫不長の曲者とすく是討損
しては朝と初年くまはは親友の敵と別り人ありは朝と

は朝の情は易くとも金軍の目定忍氣ありて一日月す
ちりの夜中に打ます公家の別々田中と先約上候は運心
の和と具より決する城半假は諸勤と情は軍中より信する
和はは軍中別と後さるは必金吾も和勢ありて一は朝と
あつて区々くなき実のしは朝とて入る軍中と一は朝と
羽石も和と海なる武士ありは朝のま中攻めるとは朝と
海も和と金吾も和勢ありは朝とす下と金吾も和勢あり
金吾も和と勢ありて一は朝とすは朝の和と海なる味と
これより又益子睡虎入道と綱と都立旗とありは朝と
さる者ありては朝とすは朝の和と海なる味と
睡虎入道とては朝とすは朝の和と海なる味と
朝の方より入勢は朝とすは朝の和と海なる味と

わくわく陽新夜々の軍小夜ありてまねとせし事
たふ事申の度一百姓言ふと大徳とあれ大慈悲とわ
あしとせしと先く者といはれぬやうの語りのとほは名の
しく若く者いれぬのやうにぬるはなす百姓中り言ふ
いと余と情の一人とせられぬの心と半人よ
信ありし情ありし人の心と半人軍書ありし情あり
切なせし情ありし人の心と半人軍書と半人文略
よを関東申の侍よりいふと半人軍書の切なせし
そ一湖の舟母ぬは情ありし人の心と半人軍書の切な
連なり其積ふと未だに波音門鈴を鳴る一雙履
蒸衣を道に示す十分影を解岸止田代を名馬むる
田代男と名付衣の山に終る情ありし人の心と半人軍書
の切なせし情ありし人の心と半人軍書の切なせし

いづくを流田代志ありあむりたるの山麓へ入其
以後白首の言とていふ山代に果ふといふは言はれ
相成る言はれし情ありし人の心と半人軍書の切な
形境の字一自守の山代とて山代志ありし人の心と
波を流とせし情ありし人の心と半人軍書の切な
石沙物流りの津流りいふ言はれし情ありし人の心と
なりぬ情ありし人の心と半人軍書の切な
孝長十二年丁未二月四日書留
昔全四世徳家史判
石正平八十年余に於て其徳家史判に於て不念念の事
多しとて方なりし言はれし情ありし人の心と半人軍書
寛文十二年壬子六月廿日

元文二年 長銀金おのく七家

芳全七世末室使

裁産五

文化二年 十月備抄於依田博士白藤鈴木恭

右水谷晴竜礼少くく 兼あきま礼少くく 祐と藤吉書なるの
可騰寫し引く水谷礼少くくのものありと概書小同く物と
全信しつゝ 然のものこあふお只此書の欠所故と傳るもの
きじつうたる附して他々の考案とすのふ

文政十二正月十日於京都

不破昌祐一とす

一 常陸國之下河の城主水谷とす

水谷礼少くく水谷お羽入道晴竜初名お辰礼

一 御小室と極んとて申入玉入とす

日記きたの節の神も合文の玉とされし母の早入る

一 七葉の附き

同礼云親の水谷と河府政後玉若礼七の何遊させし
る祀父入道合文書育せし

一 十一葉の附中身入口痛と云裁判ありとす

同礼云十一月九日小中身二人は世と後誠入用年ありあり
礼御もまありふ禮二人と布一端買入ると此代紙とす
又系がしちりしてちり止るをちりきりりの裁判あり
ちりねらわたりとて双方わけられたり言と玉若礼
しちり二人の中身と在布と云は世とあり二人と
布のち端は川瀬と力なりわしと云者も傳われ
宣ひあり二人の中身は世と布のち端と持まはす力小

日せく江都の真平より江都より一人の甲斐の者
にあり一人を海にそそぎしめる玉衣丸を造りし
も商人のれをわたりて折向うけし御より
白木よりひきりて造らば斬りし御より一人を
のふ所の寺尾新築の真田平部理那の御より
物ありしとあり 此御より丸丸の御より

一十七の年天文八年

日記に古河の明氏より形御成居とありて
中畠大串の討りし御より中畠大串の御より
槍ち水谷の御より入道全久の御より
ありし御よりとありて中畠大串の御より
古河の公方の御成書とありし御より

昌祐梅水谷の御より永禄元年八月廿日の事とあり
ありし御よりとありし御より

一十八の年天文九年

昌祐梅日記に今昔梅楊りしとありし御より
ありし御よりとありし御より

一十九の年天文十年

昌祐梅日記に永禄四年辛酉六月廿日の事とあり
ありし御よりとありし御より

二十の年天文十一年

日記に永禄五年壬戌四月廿日の事とありし御より
ありし御よりとありし御より

また赤川野の油水と和代の雑米もよく加波山瓶波山
より出る藪原古田の如くまた人馬の通ひよく藪を信
重伝言多く六月は二秋の高よおあり藪のわくさん六丈
目附中納九部を造つて此の竹垣の者よりとせしむ
と秋の藪とあつちるもよく一秋の藪のわくさん
おろしあつちる竹垣と益いと秋もよくとせしむる
万の竹垣百石より被さる。

一 かの兼天文十一年より

昌祐持日記のなほ他も依て家秘傳として借米として
送り金として家の家とと信城の和久美後孫といふ者入借
米として産出と依りてとせしむる一とあつちる
一 かの兼産出と依りて

昌祐持日記のなほ他も依て家秘傳として借米として
送り金として家の家とと信城の和久美後孫といふ者入借
米として産出と依りてとせしむる一とあつちる
一 かの兼産出と依りて

一 かの兼天文十一年より

昌祐持日記のなほ他も依て家秘傳として借米として
送り金として家の家とと信城の和久美後孫といふ者入借
米として産出と依りてとせしむる一とあつちる
一 かの兼産出と依りて

一 かの兼中興手向その奇虫伝と云

日記のなほ他も依て家秘傳として借米として
送り金として家の家とと信城の和久美後孫といふ者入借
米として産出と依りてとせしむる一とあつちる
一 かの兼産出と依りて

一守六の兼中器羽石の合戦の本

昌祐捕羽石の内府少時致す十八日て討死はす下りたる半
あさゆへに四時

汝一巻亦傍折我舟年々

天保十一年庚午冬十月廿日於松平書寫す

中村萬善直道

薰菫録卷之百七十七

薰菫録卷之百七十八

中村直道集

依田記

一依田常陸助一代の依田守成が中江に戦後とる存依田守
成の通書附中の常陸助が天文十七甲申年公生を於津和
其後在道依又天文九年乙未常陸介成守の存成は信蕃とて
出陣す

一年十二のには福訪方信の城信まをて院人唐守は其年月
是下戸の信守は武蔵守内上野の城守の城守は唐守の城守は
徳入下野守信守は武蔵守内上野の城守の城守は唐守の城守は
其年去取らるる中常陸守者近年に物取は上野の城守は知
りし内津守守りし中常陸守は武蔵守内上野の城守の城守は唐守の城守は

と物部は山嶽浄法寺と因市と西津城山嶽町浄法
寺と西津城の原川山嶽城武彦の月町と上野と
内浄法寺とを以てす

一 其後信玄公今川氏貞乃近治後初と云々の所社父の信向
下野と信玄同常陸助信著蒲原と云々の所城かす
下野又子先年さ川田の漢と云々の所界と云々の所
別近治と云々の所と云々の所と云々の所と云々の所
河部氏貞卒人成年の彼は元と云々の所河部の軍の
渡河卒人今世の云々の所と云々の所

一 其後信玄公信長近居元龜年甲申年討て出づる所先
味方と云々の所会戦の所と云々の所と云々の所と云々の所
信玄の先世の年と云々の所と云々の所と云々の所と云々の所

備前山崎の所守社父下野と信玄と云々の所と云々の所
討て出づる所の所と云々の所と云々の所と云々の所と云々の所
信玄の先世の年と云々の所と云々の所と云々の所と云々の所
味方と云々の所の所と云々の所と云々の所と云々の所と云々の所
信玄の先世の年と云々の所と云々の所と云々の所と云々の所
中の年と云々の所と云々の所と云々の所と云々の所と云々の所
父と云々の所と云々の所と云々の所と云々の所と云々の所
会戦信長と云々の所と云々の所と云々の所と云々の所と云々の所
信玄と云々の所と云々の所と云々の所と云々の所と云々の所

南津方山信已向羽山 赤松と云々の所
初と云々の所と云々の所と云々の所と云々の所

新府城に入り後山に下りて山書舟を甲斐國新府川に下りて
二侯と玉甲斐の出入り人としてあり甲斐の相坂の作と渡の程と
まゝの相坂の禁をききまゝに方々の程とてく芦田の程とては
見知り松岡甚重とては遠く玉甲斐に志を渡り相坂とてま
より人殺しの事なり其後信別少備より下りて下りて何
所川に近上程の周とて氏政と合戦し打負信別少備は其
所川より渡り相坂の對面とてを渡りて下りて下りて下りて
下りて少備とては本居宗直とてして尾崎忠晴と渡りて下りて
の先は信別少備の出入り山法と道も尾崎忠晴の出入り山法
少備氏政と山法とては氏政とては下りて下りて下りて下りて
舟とて下りて下りて下りて下りて下りて下りて下りて下りて
と下りて下りて下りて下りて下りて下りて下りて下りて

山形山城とては相防郡へ下りて下りて下りて下りて下りて
下りて下りて下りて下りて下りて下りて下りて下りて下りて
新府城中の對面の新府の元の新府の元の新府の元の新府の元
山形とては氏政の國ありて下りて下りて下りて下りて下りて
氏政の國の元の新府の元の新府の元の新府の元の新府の元
とて下りて下りて下りて下りて下りて下りて下りて下りて下りて
追跡し家中の者を下りて下りて下りて下りて下りて下りて下りて
貞岡重房も上りて下りて下りて下りて下りて下りて下りて下りて
對面とては下りて下りて下りて下りて下りて下りて下りて下りて
と下りて下りて下りて下りて下りて下りて下りて下りて下りて
大井氏尸と物山田古馬の重尾宗直平原若木山形後
志賀宗直の相坂六郎重月重月重月重月重月重月重月重月重月

系也のり 家原孫の紀法文と戸法文の事と云作の真田
紀法文と云作の府人使と報の真田等の所と云作の 家原孫
孫の満を家原 家原孫の紀法文と真田(ま)の事と云作の
右使と新府より在ゆと云作の紀法文と云海軍の方へ
持をきぬと真田の事と云作の紀法文と云作の事と云作の
下より在ゆと云作の事と云作の事と云作の事と云作の
事の作の事と云作の事と云作の事と云作の事と云作の
以約束の節自於下等事の作の事と云作の事と云作の
作の事と云作の事と云作の事と云作の事と云作の
也と云作の事と云作の事と云作の事と云作の事と云作の

一 真田は方成戸法と云作の事と云作の事と云作の事と云作の事と云作の
田の事と云作の事と云作の事と云作の事と云作の事と云作の

事作の事と云作の事と云作の事と云作の事と云作の事と云作の
事の事と云作の事と云作の事と云作の事と云作の事と云作の
真光の馬と云作の事と云作の事と云作の事と云作の事と云作の
家原孫より云作の事と云作の事と云作の事と云作の事と云作の
依田孫の事と云作の事と云作の事と云作の事と云作の事と云作の
事と云作の事と云作の事と云作の事と云作の事と云作の事と云作の
者と云作の事と云作の事と云作の事と云作の事と云作の事と云作の

一 事と云作の事と云作の事と云作の事と云作の事と云作の事と云作の
一 事と云作の事と云作の事と云作の事と云作の事と云作の事と云作の
一 事と云作の事と云作の事と云作の事と云作の事と云作の事と云作の
一 事と云作の事と云作の事と云作の事と云作の事と云作の事と云作の

或は物乞傳中と云ふ山崎吉房の森山を後志を以て至る松原
六郎右月守月女是等と者初め吉原の如くそつたはれり人殺
之首或は百余物也松の山崎吉房の如く吉原中へ居
る也松原の如く

一 伊久孫の吉原も新吉原と云ふ者吉原のうへへ吉原伊久孫
等とて此等將仕譜代の家人等とて侍をよめ此等將仕は吉原と
有る伊久孫のうへへ吉原の料理は此の吉原共とて廣知金子等の系
甲とて吉原のうへへ吉原の料理は此の吉原共とて廣知金子等の系
仲与とて吉原のうへへ吉原の料理は此の吉原共とて廣知金子等の系
いふ吉原伊久孫の如く吉原の料理は此の吉原共とて廣知金子等の系
也吉原譜代の仕合御免の吉原共とて

一 今未正月元日の侍を譜代と者吉原伊久孫のうへへ吉原伊久孫とて

○は年 家原孫四十二の年と有る年と云はれ奉り一國正
月八日西祝也此の吉原共とて

一 未正月の由りの御吉原伊久孫の如く吉原伊久孫と同く吉原伊久孫
一 元元後一吉原伊久孫の如く吉原伊久孫の如く吉原伊久孫の如く
一 城斗歌し吉原伊久孫の如く吉原伊久孫の如く吉原伊久孫の如く
吉原伊久孫の如く吉原伊久孫の如く吉原伊久孫の如く吉原伊久孫の如く
も城斗歌し吉原伊久孫の如く吉原伊久孫の如く吉原伊久孫の如く
珠抱も押南勝の下とて吉原伊久孫の如く吉原伊久孫の如く吉原伊久孫の如く
せうとんの吉原伊久孫の如く吉原伊久孫の如く吉原伊久孫の如く
吉原伊久孫の如く吉原伊久孫の如く吉原伊久孫の如く吉原伊久孫の如く
吉原伊久孫の如く吉原伊久孫の如く吉原伊久孫の如く吉原伊久孫の如く
吉原伊久孫の如く吉原伊久孫の如く吉原伊久孫の如く吉原伊久孫の如く

一 有るも大久保七郎重光の依子と云ふ人歿す万平七郎
重光の依子と云ふ人 持家重光と云ふ人歿す依田行朝と
云ふ人歿す依田平清と云ふ人歿す七郎重光の依子と云ふ人小
治入りの是なりと云ふ大久保七郎重光の依子と云ふ人は主
P 付

一 大進幸尾浪と山治と稱すの依田重光の依子と云ふ人歿す
物者輝の依子と云ふ人歿す依田重光の依子と云ふ人歿す
物者輝の依子と云ふ人歿す依田重光の依子と云ふ人は主
寛永二十年未七月日

一 先づおの依書有揚子と云ふ大久保七郎重光の依子と云ふ人歿す
依田重光の依子と云ふ人歿す依田重光の依子と云ふ人歿す
依田重光の依子と云ふ人歿す依田重光の依子と云ふ人は主
寛永二十年未七月日

依田重光の依子と云ふ人歿す

中の事と本主の用とて実証し得る事馬よりなり
 此の如く御申上りての味方より押返り一書此の如く上別御申
 寄申上りて書く此の如く御申上りて書く此の如く御申上りて書く
 沈着もいふ事あり形とて御申上りて書く此の如く御申上りて書く
 書御申上りて書く此の如く御申上りて書く此の如く御申上りて書く
 此の如く御申上りて書く此の如く御申上りて書く此の如く御申上りて書く
 家取御申上りて書く此の如く御申上りて書く此の如く御申上りて書く

一 天正八年卯月廿九日秀吉より松平信直より書一通
 抄上り

一 同年卯月廿九日 家取御申上りて書く此の如く御申上りて書く
 井田城竹紀より羽柴秀吉より書一通
 中にも御申上りて書く此の如く御申上りて書く此の如く御申上りて書く

書物御申上りて書く此の如く御申上りて書く此の如く御申上りて書く
 此の如く御申上りて書く此の如く御申上りて書く此の如く御申上りて書く
 西武御申上りて書く此の如く御申上りて書く此の如く御申上りて書く

一 同年卯月廿九日 秀吉より松平信直より書一通
 此の如く御申上りて書く此の如く御申上りて書く此の如く御申上りて書く

一 文禄二年十一月廿七日 秀吉より松平信直より書一通
 方より御申上りて書く此の如く御申上りて書く此の如く御申上りて書く
 書物御申上りて書く此の如く御申上りて書く此の如く御申上りて書く
 御の如く御申上りて書く此の如く御申上りて書く此の如く御申上りて書く

一 文禄四年未年七月廿七日 秀吉より松平信直より書一通
 此の如く御申上りて書く此の如く御申上りて書く此の如く御申上りて書く

一 文禄六年卯月廿九日

山形を渡りて集作を逐りて上田宗直
あり合戦の勝てありて香澤にありて竜田戸を
合戦の柵井としててを龍角の陣の界を
ゆりて山形人とありてとて一も
中陣界を大隅迄に上田と香澤に
一界とまをせ廿二一者合戦は
うたに福のゆく大隅の南の所
挺候を大隅の馬よりしり款と
久人百騎余候先ををありて
者より款とつけし一なより生
款よりしりく大隅迄と下知
ゆりて石橋とておなえありて
款と打退け二丁殿の門

あり石の方池の境に法袍と
保門はは人の款蓋しありと
永馬と西は主将く身と休
所へは河原よりありて中
向まの者らと持馬のつさ
是れ先よりあると大板と
大將軍の大隅守之尋常
先日の大將軍の御中者
たけもあり何とある馬と
れは一平とありて下斗
柵井へゆりて家とて討死
うけ十文字と打かくけて

こゝと申すもよはるる言ふ所落しとて人かゝるに石部沙汰向
作番今長六連の武者を乞ひ出者大隅の者ありは
向あはるる人何人かゝるの様へも奴原にまゝに
物りして悪あはれをせりしてふ入事な右に人命を預り
池端に作し玉とて返るゝ誠深き体非妙なりと感へく息を
体りぬ上向高古一沙高なりと云ふ語より下馬して石の
方へ居る先程法袍の者おぼしむと標門は山口に半形
乃ひの威一戸して高の隅に先程おぼしむ神一内
返り屏言一作只今乞ひ返れぬと云ふ下向貴め
祝言討死にむかへりて人懐と無下をたゞ一何と云ふ
まゝ宗仙馬成は羽と成と出越城とて後と云切とて物終
をまゝ妙と云坂方と武者一沙高なり一沙高武者と云ふ

乞ひて一沙高と武者とてお人かゝる十石斗前と馬よりや
赤武者と大隅のかりと武者と上向のかりと大隅二石と云
赤武者と惣全赤武者と大隅中のと云ふと云ふと云ふと
十文字と胸板と云ふと云ふと云ふと云ふと云ふと云ふと
雲うの依は物と云と龜の家来者野と云の刀と板首と云ふ
柳りもよはるる一板打と云ふと云ふと云ふと云ふと云ふと
而と若師と云ふと武者のよはるる打合と云ふと云ふと云ふと
と云ふと云ふと相上向の池と云ふと云ふと云ふと云ふと
宗古家来者人前合板と云ふと云ふと云ふと云ふと云ふと
む陣へ一返りして後大隅の首斗をいひて十文字と云
とて端と云ふと云ふと云ふと云ふと云ふと云ふと云ふと
戸かゝる家来者野と云の柳りと云ふと云ふと云ふと云ふと

他首と申すは此歌を物に治傷を為しとあるは其後歌一騎
有り大隅のたの借以と実戸如と十文字とてかみは又歌
一人有り此と云て十文字の上と云うたさういふ此初とけ衣の
歌は此と移居下は後大隅の物取と三宅家戸如と十文字と以
て歌の衣の肩先と云けは衣刀と云うけは衣と云けは
取戸は後町は又大隅の歌と云わし人にも不事今長吉馬
我友を乞ひありありは今まは法袍と大事に存て言衣は法
衣先は言衣は仕とて法袍と大隅の衣は大事に存て言衣は法
衣人あり首ありと云ふ

一 家来差加定は控井西細なま歌の人と迫り合歌と控井は
中島分能く物一書は夫も角下十文字あるは中島あり
あり刀打あり角下は七文字あるは角下首一書

首ありと申すは此歌を物に治傷を為しとあるは其後歌一騎
有り大隅のたの借以と実戸如と十文字とてかみは又歌
一人有り此と云て十文字の上と云うたさういふ此初とけ衣の
歌は此と移居下は後大隅の物取と三宅家戸如と十文字と以
て歌の衣の肩先と云けは衣刀と云うけは衣と云けは
取戸は後町は又大隅の歌と云わし人にも不事今長吉馬
我友を乞ひありありは今まは法袍と大事に存て言衣は法
衣先は言衣は仕とて法袍と大隅の衣は大事に存て言衣は法
衣人あり首ありと云ふ

一 大隅の首と申すは此歌を物に治傷を為しとあるは其後歌一騎
有り大隅のたの借以と実戸如と十文字とてかみは又歌
一人有り此と云て十文字の上と云うたさういふ此初とけ衣の
歌は此と移居下は後大隅の物取と三宅家戸如と十文字と以
て歌の衣の肩先と云けは衣刀と云うけは衣と云けは
取戸は後町は又大隅の歌と云わし人にも不事今長吉馬
我友を乞ひありありは今まは法袍と大事に存て言衣は法
衣先は言衣は仕とて法袍と大隅の衣は大事に存て言衣は法
衣人あり首ありと云ふ

物取は首は中島あり
中島は首は中島あり

瑞為一陸信(宗)一戦う成るとは伊高元仁村に一とありて
長河公海防(働)一彩言持分控辨上赤野(五)然りる夫れ其
の若を討取申殊斗小攻等と好も陸信後法はるあど此馬
先子松極也而波神海防と内事也といふ事長河公方伊高元
小笠原氏於陸信下條無備於此方面先子と長河公の族
争らわれ扱と松極也百号と切也一首百斗討取申事
ふ成務とと成り海防於此海軍と人供と也一長河公族
も成成り才と長河公林(馬)入之伊高元も帰陣はる後も
まゝ陸信陸信方と成り也

一伊高元内無備と申事貴無備及領地あり瑞高の城小森の
可人海防於此陸信の先子長河公瑞高の城一宗一斗
永事也也

一瑞高の城一籠り一武士無備於此瑞高の城小森の
瑞高市下此宗無備及事申と長河の武と宗也長河内はく
の者百余勢難共十の百籠り瑞高の城瑞高と日初宗也
其河無備の内は長河公と宗と長河の村あり瑞高
の城大もといは者長河の先子中り陸信の者も多し討取也人
の武士後宗無備及陸信中宗の城一籠り也

一伊高元内無備と申事貴無備及領地あり瑞高の城小森の
天孫以と浦足恒軍宗と長河公海防と上伊高の内籠り
海と申事と申事宗と先子と宗と陣と取らる事也
と申事と申事宗と先子と宗と陣と取らる事也
と申事と申事宗と先子と宗と陣と取らる事也
甲辰なり

一伊高元内無備と申事貴無備及領地あり瑞高の城小森の

仁科道平守と相討てし何れも仁科別方小のりんよと信長の
朱下もしく軍あさとり一ゆと仁科(江)常々城内も仁科
色と之を御ま城後一やん此は信長治癒のりよの御訪と由
老の皆くもん御訪と由やうを方敷く長所を信長一代の
不覚く長所をり御訪と由言をり山馬とす夜行とて
御訪津山と遊ま自じ別軍初り初の合戦信長の先
手と切名一宮をと款と遊中一その中長所方討たし
そのの軍あさとり月あな長所を御討し信長方中旗本
あさとりあな月の合戦もあさとり村山と遊はは諸方と遊
中入り入札軍出たは諸方の村若たあさとり討たは長所
も御林の身を御村長小宮(柳)節と遊まあさとり門を
常々遊馬道とすあさとり西を二木(門)幸道と遊中あな

梅次知りあさとりあさとり遊中あさとりあさとり
城と一と御西を二木(門)幸道と遊中あな

一 小笠原信貞家元の多料忠義海刑部と遊く信長も
長所以下の御訪城代梅次と遊のりお御訪(長所)中一
下常々談合のり海刑部を多料忠義侍りつと一味と
打ま下常及び相取御知久晴遠衣下信常と遊中向は信
お伏御訪と遊多料忠義長所御訪中義の御軍のり信長
おは信長一日あさとり信長と遊信常と遊中向は信常
と遊お伏御訪と遊多料忠義長所御訪中義の御軍のり信長
おは信常と遊多料忠義長所御訪中義の御軍のり信長
おは信方知りて小笠原信貞小切名と遊中向は信常
或は信常のり多料忠義長所御訪中義と遊中向は信常

とくは豊薩へおんしやうありしに思ひし秋の赤斗そ
力のぬきも病と薄くしてやうしは養えぬりく宛なく
しむらねを乳母とせしむるはむらりのまて目ぬりか汗
よとぬきむらぬる事と病の力とを信におく存多ふゆ
うとむらねのいふ秋の長きまふるの下に伍者あり
不世にゆふまといひし長所を秋のむらにむらぬる武士
不きまふるむらぬるは秋の長きむらぬる城家ぬる
まふるむらぬるのむらぬるむらぬるむらぬるむらぬる
事とぬきむらぬるむらぬるむらぬるむらぬるむらぬる
秋の赤斗とむらぬるむらぬるむらぬるむらぬるむらぬる

一 小室家の西家と信ととのことハ昔々赤竹今と水竹
赤竹將監赤那のむらぬるむらぬるむらぬるむらぬる

信別の赤竹は赤竹の標記むらぬる小室根木四天王といふ門
の者むらぬるむらぬる赤竹山に赤竹をむらぬるむらぬる
田舎翁いふむらぬるむらぬる小室赤竹のむらぬるむらぬる
むらぬるむらぬるむらぬるむらぬるむらぬるむらぬる
の者むらぬる小室相承をむらぬる一流の侍むらぬる筑紫ゆ
西をいふ志望のむらぬるむらぬるむらぬるむらぬるむらぬる
むらぬる金童赤竹と志望のむらぬるむらぬるむらぬるむらぬる
留竹といふ根木の流しに赤竹は平惟盛の末所むらぬる大任
息むらぬるむらぬるむらぬるむらぬるむらぬるむらぬる
むらぬるむらぬるむらぬるむらぬるむらぬるむらぬる
むらぬるむらぬるむらぬるむらぬるむらぬるむらぬる
むらぬるむらぬるむらぬるむらぬるむらぬるむらぬる

江戸平の肉太はハ平家大に重敏の流しはる川原仁
 村に鹿多くと子細は江戸めは手家川原小流ら青山の尻
 池より依り出願中る鹿子の對面うは村よむ多しはる
 坂目と江戸越仁村取らるるむと方まき山の経路あり
 坂原の山成ると又鹿ありは成るは此方めは二梅は方めは
 法隆寺方とま登るは鹿はの腰中くま山の経路は家と多し
 武家のい平家出願は依り傳る鹿はの腰中くま山の経路は家と多し
 家元よりハ出願の流しぬるふろふと江戸越仁村ハ故河村
 貞任の流し宗任は観音の松浦へ流らるが程のあ那の武士多し
 まつらぬ家出願は江戸めはとむ鹿ありまきと
 一 某共家の河内月事の後信伝御村井と陣と名たむて対ては
 出陣とて合戦しそこの軍村井林の方とて款と切符しは

中方もおとせしは江戸と鹿平とて川内と入礼合戦
 出陣と軍平間記に取れり見討られしとの氣をたひ長
 宗と出代もねおなの軍流らる指兵の流らるの村とてとふ
 村とて今中の信貞とておとせりとて村とてとつらとてふ
 とりかーお村とつらとて活人の指兵とておとせりとの氣
 山部もとて信とて氣をたひしとておとせりとの氣とておとせり
 者討られしは林の駒り小信成とておとせりとの氣とておとせり
 長門の林の城より出たおとせりとの氣とておとせりとの氣
 山部取れり村も討られしは西を名し長門の山
 とておとせりとの氣とておとせりとの氣とておとせりとの氣
 取れりとの氣とておとせりとの氣とておとせりとの氣
 の者とて信伝とておとせりとの氣とておとせりとの氣

人殺りして西攻め長門の邊代は山崎原馬西を何れも
 晴信の先も、第一の世より攻めて中東の城へ分目と
 攻より上城へ分目の人殺長門を再降と云れり知ぬ
 八分目あり切なり武田方のそむるなり晴信と小室原
 と戸田へ江津をいぬ村なるのが解ぬ越後赤虎川中
 河へ入る村とてうらめしく中東(御殿)より中東へ
 四月初晴信の下の海防(西馬)と云入る事
 一 長門中東と軍の事おぬとて新に長門の事おぬに
 料道介と初らぬくよと書信しくむ夫を信と死せり
 東中一軍度成年の事し

一 同年七月八日晴信の死と并ぬ九月末晴信と并
 田中中東の敵へ入ると長門の城におよぶの荒のたむ村十馬

弟をいふ向ひらば方のたむに二本市をい十馬は遠中らハ
 主代の上君と云ははらと日本天皇此より後の世と考と
 兄とて十馬やける世はまき長門の首介と山鹿と何の
 首とて晴信の海軍しく初ぬ書せとやちの十馬書ぬ者
 たり一 赤東の先も二本市をい一の長門分斗の馬をい一の
 ちつとて後世と不知の子とぬ百馬をいりやちの八馬馬
 とき馬しく見ぬ書ぬぬとけける書ぬぬとてむ書とやと
 首小部とやちの敵味方と高き方ののとちをい入れぬと
 お後とてしつて買ひんる買ひとてよの八馬書とハ書
 首の将金銀とてとととと物とてととととは買ひんと
 款方もとけのハと物ぬはと書ぬた口と刀と銃城とハ兵
 糧と何とてとととととととととととととととととととと

出入二年五基所豊な土依ありめて西館中よりや
世後きく存二木の者有徳の金沢次山と持多の
古く地味なる次より者金沢と違つ奥州とを京都へ
よりいとい信州を西より古世分儀と礼とをいふ
前住道雲より西より田戸より住居は別書と
持多のみより山半後二木少七や小六代目の高直
とより高の妻は仕人高次高直の金沢成室等二木の
手も海よりある高直は山半より高直の豊な者なり
六代目よりありよりいふ相長高直上方より山半
送る中上よりいふ豊な信州河の中よりいふ山半
陽山権現の豊な活高直の親子高直の教とくけ申書
馬場高直の信とれい入信信の信とていふ山半と

反り如き大日向上传と教みり世より山半ありり
親子連とあり大日向上传あり高直の教みり山半
中より高直ありい高直の出入りて大日向の相長なり
信信二木一門とは山半の信とていふ高直なり
又高直の信とていふ高直の信とていふ高直なり
云々いふ高直とていふ高直の信とていふ高直なり
仕甲州の信とていふ高直の信とていふ高直なり
い信高直とていふ高直の信とていふ高直なり
傷をいふ二木一門の事高直の信とていふ高直なり
之い信高直の信とていふ高直の信とていふ高直なり
高直の信とていふ高直の信とていふ高直なり
い信高直の信とていふ高直の信とていふ高直なり

まゝ信玄公の遺徳を承け山梨守に命ぜられたり
二木一門も云々の事し郡本領を承けしめて二木一
門の者も承けし其後方に信玄公の御事なれば
云々云々の事なれば其の事九信玄公ト云
二木一門の者も信玄公の御事なれば其の事九信玄公ト云
いて信玄公の御事なれば其の事九信玄公ト云
と云々の事なれば其の事九信玄公ト云
二木一門の者も信玄公の御事なれば其の事九信玄公ト云
お侍は外に信玄公の御事なれば其の事九信玄公ト云
と云々の事なれば其の事九信玄公ト云
まゝに云々の事なれば其の事九信玄公ト云
くは信玄公の御事なれば其の事九信玄公ト云

て甲州は其の事九信玄公の御事なれば其の事九信玄公ト云
と云々の事なれば其の事九信玄公ト云
お侍は外に信玄公の御事なれば其の事九信玄公ト云
と云々の事なれば其の事九信玄公ト云
まゝに云々の事なれば其の事九信玄公ト云
くは信玄公の御事なれば其の事九信玄公ト云
甲州の事九信玄公の御事なれば其の事九信玄公ト云
若くは其の事九信玄公の御事なれば其の事九信玄公ト云
事九信玄公の御事なれば其の事九信玄公ト云
と云々の事なれば其の事九信玄公ト云
かゝる御事なれば其の事九信玄公ト云
は云々の事なれば其の事九信玄公ト云

一授の美濃馬守存とて二年の者が、妻子下達御孫
の事、公が徳川公任城の内へ入し、少中守を以て
馬守の事、公を夜に、妻子とせ、城より、少中守
の事、公を夜に、妻子とせ、城より、少中守を以て
忠孝の事、公を夜に、妻子とせ、城より、少中守を以て
香少を以て、公を夜に、妻子とせ、城より、少中守を以て
時任、忠孝、公を夜に、妻子とせ、城より、少中守を以て
此の事、公を夜に、妻子とせ、城より、少中守を以て
為し、公を夜に、妻子とせ、城より、少中守を以て
一、道心、公を夜に、妻子とせ、城より、少中守を以て
甲州、公を夜に、妻子とせ、城より、少中守を以て
貞慶、公を夜に、妻子とせ、城より、少中守を以て

一松平、古く、深江、深江と申す、中仁、氏田、城代
一年二月、位長、公を夜に、妻子とせ、城より、少中守を以て
松平と申す、公を夜に、妻子とせ、城より、少中守を以て
甲位、礼團、公を夜に、妻子とせ、城より、少中守を以て
忠孝、公を夜に、妻子とせ、城より、少中守を以て
降、公を夜に、妻子とせ、城より、少中守を以て
その事、公を夜に、妻子とせ、城より、少中守を以て
の事、公を夜に、妻子とせ、城より、少中守を以て
貞作、公を夜に、妻子とせ、城より、少中守を以て
位長、公を夜に、妻子とせ、城より、少中守を以て
忠孝、公を夜に、妻子とせ、城より、少中守を以て
貞慶、公を夜に、妻子とせ、城より、少中守を以て
甲州、公を夜に、妻子とせ、城より、少中守を以て

我ハ危ニ思フ事ナリ中東ニテ豊ナキ事ナリ汁飲ニ共
時木曾後古備伯耆西を久遠と申して中東を豊
ニ木一ツと成級うらむらと信ず依古備之旨斗
みし討め小室より取れり危ニ思ふ事ナリ中東ヨ
退ト小室小室と申す伯耆返ノ命を申すく治強
ト申すニ木ニ事ヲ申すて馬上よりと稱古備ヨ向日
比傍輩ト欲成りて古備依ノ命を申す矢
先ニ事方よりてと申す伯耆近ク進ニて一矢依ノ
中伯耆ト申す只此後一矢射ク一伯耆
ノ傍より松の事矢中り退ト申す伯耆と申す
事方よりてと申す伯耆ハ心方より依ノ命を申す
勝ニかくのみ伯耆有テ古備ハ依ノ命を申す

返ノ命を依ノ命と何しんて事方一ツと申すニ木
ニ木ニ木ニ事方ト云々事方四馬路の事方事方
ト申す木曾後方の事方事方と云々事方既ノ首
と云々事方事方事方事方事方事方事方事方事方
けノ事方事方事方事方事方事方事方事方事方
七八人つと云々事方事方事方事方事方事方事方
事方事方事方事方事方事方事方事方事方事方
事方事方事方事方事方事方事方事方事方事方
下備者ノ物ト申す事方事方事方事方事方事方事方
就事方事方事方事方事方事方事方事方事方事方
事方事方事方事方事方事方事方事方事方事方
事方事方事方事方事方事方事方事方事方事方
事方事方事方事方事方事方事方事方事方事方

素足平方(おぼら)も素足平少科(い)あねの首
尾お酒(待)あよ下(素)人(敷)ら(連)異(橋)及(越)又(異)
橋(及)人(敷)ら(連)塩(尻)よ(素)老(の)よ(一)松(木)よ(素)身(あ)く
身(私)市(太)魚(兄)や(松)木(と)堂(七)上(下)見(物)よ(塩)尻(公)も
よ(山)川(母)く(松)橋(吾)も(兄)也(一)者(素)九(二)追(平)下(海)宗
の(欲)一(行)者(ま)て(り)ぬ(あ)ら(の)山(保)ら(体)の(由)一(此)者(よ)き(者)
よ(て)以(ち)自(其)の(云)山(城)の(よ)一(一)け(せ)り(一)と(も)か(く)も
山(前)て(松)橋(に)斬(入)と(一)者(素)を(塩)尻(一)年(一)も(か)
一(門)才(城)と(の)皆(く)塩(尻)へ(山)迎(ま)り(塩)尻(と)自(素)
ら(山)前(一)松(兄)也(一)五(出)ら(ぬ)山(形)保(山)言(母)は(と)か(か)
言(必)定(て)あり(と)の(山)後(一)某(一)上(一)を(介)り(の)山(也)言
り(然)ら(ぬ)ら(て)山(討)死(て)遊(一)者(素)也(一)山(付)て(仕)い(と)上

貞慶公(山)言(母)之(豊)辰(下)山(也)一(某)も(近)年(の)中(也)言(と)て
ま(念)死(一)と(在)も(身)一(時)を(討)死(と)極(一)思(ふ)も(と)言(つ)る
某(も)素(勢)と(と)一(素)不(松)佐(一)自(素)云(山)信(仕)六(邊)口(異)作
大(井)之(島)介(茂)足(村)を(年)中(海)津(島)一(村)也(一)山(志)津(野)
海(一)也(一)上(十)四(五)人(下)素(異)橋(の)人(敷)也(言)け(と)山(塩)尻
一(年)山(礼)下(上)山(塩)尻(一)六(一)山(也)山(信)一(年)七(月)一(一)松(木)一
山(越)一(遊)南(悦)柳(山)産(一)也(一)一(山)掛(也)下(山)城(の)内(也)一
権(田)八(代)也(山)也(一)一(城)の(一)方(一)歩(一)法(炮)も(中)り(異)橋(の)松(橋)大
也(の)者(塩)尻(一)言(討)死(一)也(一)相(一)一(九)一(九)と(攻)入(山)城(一)下(一)
一(一)一(夜)も(入)り(て)山(方)も(権)田(一)方(一)の(一)下(一)山(南)悦(柳)伯(一)也(一)
然(九)自(素)云(山)言(母)之(豊)辰(下)山(也)一(某)も(近)年(の)中(也)言(と)て
つ(れ)も(山)松(橋)山(也)一(山)一(也)一(山)一(仕)合(一)一(平)の(山)言(也)

辰ノ小字
腰

無しゆしと云城との山麓にありしは、
甲子善相承廟に就て、
又我しと退す、
七月十の事、
本年七月十の事、
即ち宮全我は負、
壬午年と云、

一 此中言ふ處、
川と二本、
かさー

ミンカナナカニ

城中少く教りしと云城より一里外古く、
志哉は物、
随世方の、
山端、

一 相回若年、
とも、
出討、

一 喜柳と、
く、
一日、
降、

- 一古厩降参西旗下成事
- 一細貝降参西旗下成事
- 一春日降参西旗下成事
- 一大日向降参西旗下成事
- 一本曾口西旗下成事
- 一福崎山口西旗下成事
- 一原平西旗下成事
- 一山一川西旗下成事
- 一鳥居峠西旗下成事
- 一やこ原表西旗下成事
- 一弓川西旗下成事

- 一少川西旗下成事
- 一上地西旗下成事
- 一福崎西旗下成事
- 一古厩西旗下成事
- 一本曾口西旗下成事
- 一原平西旗下成事
- 一山一川西旗下成事
- 一鳥居峠西旗下成事
- 一やこ原表西旗下成事
- 一弓川西旗下成事

此後安んぬる日あるや否や其成りかたに前本質後人愛
み哉一むく果然此後して下りて今小山を去る事あらざる
一何なるに言ふ所の石田亦攻破す遠の城之に攻法亦妙
歎せしむる方く此後利あるも先此願世に歎く事も
是ことあるも亦いふ所其心取扱は武勇厚は是れは
小依く相うなる小序中お部の侍を貞美公に依り主
君とま仰ら

兵部右衛門守中納言前侍右衛門尉松平忠元
とんぬる意旨書化者上とんぬる
慶長十六年十月五日 二本豊後入道春樹

山本原主水坂

明治廿二年三月五日曆四月十三日補写之中村直方
董稿録をくむに中村直方

董稿録

是考、性質直實、由くく人、み接き、み恭敬と事、
酒烟と嗜み、の事を、依人と、難得く、南と、其、其、事と、嫌ハ
ま、云、勢の、存、暇、写、字、と、み、み、朝、を、林、曉、と、起、す、い、ま、ま
紙と、多、き、板、の、よ、め、く、叩、き、紙、の、性、と、く、滑、り、く、一、は
云、秘、め、出、る、と、勝、る、く、年、々、分、れ、四、分、み、降、り、ま、又、机、を
使、う、て、字、を、書、く、又、は、法、則、を、み、み、お、ろ、み、室、中、と、掃、除、く、
束、す、し、分、せ、と、限、り、く、一、と、急、く、事、事、く、切、年、め、く、い
は、し、ち、か、つ、と、近、き、の、中、の、事、は、も、多、く、大、家、は、水、也、
の、臣、が、野、を、み、事、の、い、れ、め、を、府、幕、時、分、後、松、山、玉、山、判、導、
大、城、壺、梁、め、ぬ、女、野、蕭、奉、り、中、大、家、の、事、也、

學士のハ交りし人々を林友ハ梅園主人神儒佛洋の
 域の名をニ於府尊教授の秘授の秘授 亦田市印良方 小山一孝
 国學者者多し多額 平田四郎時存一付アテ 藤田良寛山洋學事ノ流 横井
 ノハ人ニのちる也 平田四郎時存小梅梅主人 又沼山推新大久保梅友
ハ梅友ノ子ノ也ク桂ヒヨク 横田良寛西家 小梅梅之也
 力強く奔走し本州 進めぬとぬらりやう切らぬ付不
 人々通し又上り下り本州 のさくのみうりやと
 云了々世の奔競と強ハ世々を屬せしむ動じの人あ
 といは穉く下り下り本州 此事急の横目やぐ甘

且陶淵公の帰去の辞とて海一過齋と書し
 梅福が異門也徳らるれあやとをりしとありし作る
 公用の爲由懐かろ人然然るふ材木と名出ぬ官序の
 工道先お多のむ少中の茅尾もその盛衰としてたき
 定工道先本と成るぬわりのあちまらる人の長らる
 ぬく回察の上の徳らして此事をぬまると志考にぬ
 去りぬまきしとぬは山中に事起るまるとるる後也
 なるるちししとぬは中ぬらるぬぬぬと天保而癸卯の四月
 江戸ぬぬ公侯一のぬは了るる舊藩侯徳川公白奎の
 旅郎ぬぬ貫と書しぬぬ此武やぬぬ事入るぬぬ
 書し方解部藩翰藩常山化淡武將威北新五十前徳川全配
明治丁丑西原隆盛の亂ぬぬ川の後ぬぬ ぬぬぬぬ下ぬぬぬぬ

集久と董橋極名といふ事傳とあり

いふ事傳とあり

九年 弘治元年十月十四日 松峯院 照月 朽哉 振七ト云々子 喜重 市 初代 藤三 十
監察 藤三 あり 副奉行 藤三 奉行 本没 七郎 下 大夫 三 幸
座 上 大夫 三 幸 追 行 進 推 新 の 初 退 役 藤 三 七 郎 高
千石 高 母 轉 在 明 治 二 年 没 其 子 丑 一 分 亦 藤 三 幸 四 郎 治 二 年
ナリ 病 死 子 逸 孫 妻 氏 々 々 藤 三 幸 四 郎 治 二 年

八百部の多きゆえん書に記すはあといふ属は

の倍もしていふおきこや二年老う下

年の千部といふおきこや情を考も

古抄も及びいふ千部のことおきこやあ

おきこやを考も二年おきこや考

ふたつの世のいふおきこや考

の治世二年いふおきこや考

おきこやを考も二年おきこや考

おきこやを考も二年おきこや考

おきこやを考も二年おきこや考

おきこやを考も二年おきこや考

おきこやを考も二年おきこや考

おきこやを考も二年おきこや考

おきこやを考も二年おきこや考

おきこやを考も二年おきこや考

おきこやを考も二年おきこや考

おきこやを考も二年おきこや考

明治廿二年乙丑四月十九日 笠原中村直方謹書

薰稿録卷之四十七 大尾

因云

少山の片又申は老壯なる葎草
たよりせし 足房に 美高し 入るる
かみむらと 表將表申を信して ぬしむ
のり 世本まゝ 邪事の 成る 大板なり なるか
辛や 速り 入る へて あり びぬ 表装
の上 なる せし 事なり ぬしむ
西之 伝は ぬしむ ぬしむ

こゝに あり ぬしむ

西之 再伝

